統一
第二百二十七號
明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
大正三年一月十五日發行（毎月十五日）

文學博士 三宅雄次郎君序
大僧正 本多日生師著

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
正價金四圓
特價金參圓
內地郵稅金貳拾錢
臺清韓八百匁迄の小包料

目次

◎序說●第一章緒言●第二章法華經の教義●第三章諸種の法華經觀●第四章天台の法華經觀
○第一節三種教相の綱格○第二節十雙權實の巧釋○第三節六重本迹の大旨○第四節三法々鈍の解釋○第五節待絕二妙の解釋○第六節一念三千の妙觀●第五章日蓮の法華經の觀妙○第一節本化別頭の教相○第二節但令用實の活斷○第三節佛界緣起の妙旨○第四節信念成佛の要道○第五節究竟圓慈の活釋○第六節聲色爲經の眞義○第七節應身常住の妙義○第八節本尊光顯○第九節兩善一貫の活論○十節台當教相の異目○第十節一唯身讀法華の壯觀●第六章天台講經要義○一節廣釋四教五時の統釋○五重玄義の妙解○第三節法華經の科段○第四悉檀運用の活釋○五節文々釋●第七章日蓮請經の玄義○第一節日蓮上人の學風○第二節本化獨特の五玄●第八章妙法華傳○譯の概略○釋文●科段●來意●大意●釋題●文々解釋○通解○妙解○異解○批判○質議○解決○字義○參考○讃唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中心、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞實を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京淺草北清島町 振替東京一二一九 統一團

大正三年二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百二十八號

統一

大哉日蓮主義　大僧正 本多日生
時弊と教育　陸軍少將 小原正恒
日蓮主義と江川坦庵　海軍中將 宮岡直記
開結二經の研究　井村日咸
日蓮主義信仰の實感　藥學得業士 金澤巖
法華經中の文意質疑　辯護士 鈴木充美
現在主義の靈化　三上義徹

▲教光無盡▲活動通信▲

●緊急廣告●

▲こゝに殘本數十部あるのみこの機を失して千歲悔ゆる勿れ

天晴會講演錄（第貳輯）

內容

▲本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるものにして、日蓮主義が眞理批判の上に如何なる地位に在るか、又現代思想界革正の上に如何に大なる權威あるかは、六百餘頁に亘る金玉の文字の中に潜めり。

豐富

▲講演者は、本多大僧正、井上中佐、小笠原大佐、五島子爵、小林文學士、姉崎文學博士、高島平三郎先生、辻文學博士、松森僧正、柴田一能先生、竹內久一先生、田中智學先生、林陸軍中將其他の名士也▲

▲價格——一部金貳圓。郵稅金拾貳錢とす

▲送金——東京淺草北淸島町三上義徹宛（爲替）の事

▲求道者の座右に本書なければ恥也本書は其人の品格をかざるもの也

◀不滅の生命と精神生活の活力はこの書に在り▶

主要

現在主義の靈化

現代の文明は科學の力によりて自然を征服し、物質的繁榮を以て人生唯一の幸福なりとおもひ、間斷なき事業と生活とに忙殺せられて、目に見ゆる地上の成功を追ひ、奥深き所に無限の向上心を懷きながら、空しく双脚を泥土の中に沒し、自由の大空に翱翔せしむることが出來ない、されば活動と云ふも奮鬪と云ふも、感覺的欲望を滿たし、唯物豐富を目的として手足を動かすに過ぎないのではなからうか、感覺的享樂の代名詞たる黃金を求むるには、節義も名譽も惜氣もなく賣拂つて恬然として恥づる所がない、日蓮上人の『鳥は木にすむ、木のひきき事をおぢて木の上枝にすむ、しかれども餌にばかされて網にかゝる、人も又如是』との警訓を以て、小人の思想態度を摘抉して居らるゝが、今の所謂現在主義を解剖して餘す所なきを觀る、されど衝動や本能やの生活より半ば醒めたる現代の人心は、何となく人間の生活より蹴落されて、自分の生存さへ保つことが出來ぬことを內省するやうになつて來た、さうして一時的現

在主義の生活より脱け出ていゝ、活動を信條として精神生活に入らんとする氣勢が顯はれ、自己の目的遂行の障礙となり抵抗する所のものを突破して、反動を押し開かんとする、猛烈勇敢なる戰鬪力を有する精神生命は、進め退くな動け息むな突破せよと猛進して、善美莊儼なる實人生を建てんことにつとむ、斯の如く一たび精神生活を營まんとする本源の生命より、偉大なる向上力が發揮せられて、內的生活の爲の戰は、勇ましくも開始せらるゝやうになつた、內的生活は空しき想像の世界に存するものでない、事實に於て自然界に働き物質の上に動くものであつて、獨立的實在として夫れ自身の世界を創造しつゝ、そこに活動を繼續するのである、爾かく自然の肉的生活に對して全然否定を敢てするものでない

『されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても常寂光の都なるべし』との日蓮上人の思想は、明かに這般の關係を調整したる妙談である、活動或は奮鬪と云ふ、是即ち精神夫れ自身の生活を營まんとする一種の心的努力であつて、肉的生活を蹈臺として自己內在の久遠佛性を開き、一歩高く向上の天地を開拓するのである、されば精神生活は創造開拓の向上生活である、科學萬能の唯物的生活を征服し靈化しつゝ向上の道程を辿りて行く處に、人生存在の眞味もあるし、內觀的實際的現在主義が見

得らるゝ、さうしてこゝに宗教的生活の奮鬪となり、主觀の自覺と客觀の大實在と一如し、慰安と勇氣に充ちたその生活、こゝに始めて事實の上に靈肉調和の實生活を送ることを得るに至る、佛教的に云へば實在顯現の始覺生活で本因妙位である、この信念生活の內容や、自利獨善の誤れるを悟り、自己と他との因緣を顧み、自己と團体との關係を察し、過去に戀々せずして過去の繼續を憶ひ、將來に囚はれずして將來に遷移すべきを考へ、過去と將來の中間なる現在に於て、法華經に示せる『不染世間法如蓮華在水』の自覺に立つて、現在の爲に最善を盡し、現在をして美化靈化せしむるの奮鬪と活動を要する、われ等は現に日本人として日本に在り、日本人として日本を常寂光たらしむるに勤勞する、それが直ちに世界の爲に計る所以であつて、是即ち信念生活の本義である、われ等が言ふ所の現在主義である、過去が發展して來たこの現在はおのづから發展して行く未來である、故にいまこの現在をして『我此土安穩』の靈國として實現せしむる爲に努力創造するそれが、精神生活の立脚に立つた現在主義であることを唱へざるを得ない、日蓮上人の奮鬪は新人生の創造である、法國冥合の爲の努力運動である、さうして彼處に理想の樂園を求むるのでなく、此處の自己と家庭と國家との上に、生命ある文明を實現して來るのである、かくして現在を美化し靈化し光榮あらしむ、來れよ男も女もみな共に來れ、新文明の爲に心の夢を醒まして日蓮上人の慈懷に突入せよ

主義

大哉日蓮主義

大僧正　本多日生

健全なる文明は健全なる思想の發動に依るべきてあります、故に個人の人格完成とか、社會の公德心とか國家的道德とか、人道的道德とか宗教的信仰とかの、凡てに就てその何れをも敬重し、其一を取つて他を排斥するが如きは、大に警誡すべきことてある、釋迦の教にしても宇宙の方面のみを說いて、社會的國家的の方面を忘るれば何等の價値がない、孔孟の教にしても深遠なる哲學的基礎を忘るれば健全なりとは言はれない、國家的道德にしても其處に人道博愛の精神を缺くならば批難を免れない、要するに各方面の道德全部を網羅し、其長所を集めて之を適當に調節すべきてあります、我國の思想史を觀來りまするとと、健全なる思想は調節的に進んて居るのてある、今其二三の概要を述べて見まするとと

▲儒教　大學の始めに誠意正心修身齊家治國平天下と云ふことがありますが、誠意と平天下とを貫いて居り、個人の修養から世界的道德まて貫いて居るのて、即ち一切の道德を調節せるものてあります、又中庸に『小德〈川流〉大德〈敦化〉』と云ふ事があるが、小德は川の水の流れて悖らざる如きものて、此の小德は幾多に分れても並び行はれて相悖らず、さうして大德ありて之を包容し調節し行くのてあります

▲國民道德　建國の事實理想を中心として忠義の精神を培養すべきは勿論宗教家ても文學者ても政治家ても、共に國民道德をいやが上にも發揮すべきてあります、此の國家を愛し國家を經營する國

民道德から、進んて六合を照臨し、及び天地神明を尊敬すると云ふ風に、世界的道德宇宙的の道德まても貫いて居るのてあつて、大和魂の中には悉く之等の思想が包含されて居る、眞に調節的道德てある

▲佛教　佛教には四恩を說く、四恩とは、一人の人あれば家に屬し家に父母あり父母の恩がある、又同時に社會に屬し其處に社會の恩がある、又國家に屬し國王の恩がある、宇宙に屬し天地の恩かある、如何なる場合にも此四恩を有して居る、而して其中に於て緩急あることを教へ、即ち四恩中皇恩最も重しと說くのてあつて、國家を中心として四恩を調節して居るのてある

斯の如く諦觀し來れば道德は一元てあります、即ち宇宙的の信仰も、又世界的の人道も、國家的道德も家庭的道德も一元より發し來るのてある、又究極の目的より考へても、究極の目的は一切の人類を救ひ終る所まて進むのてある、儒教ては之を仁と呼んて居る、仁は天下を救ふの精神てある、又國家が國民を愛撫する精神も、往いては世界の人類を救はんとするのてある然し物には順序があつて、今の時代は人類を中心とせずして國家を中心とし、國家の結合力を以て最終の目的に進みつゝあるのてあります、而して佛教には此の思想を調節して在るのて、崇高なる信仰を教へ人格實在を說いて居る、又菩薩行を奬勵して居る、一言に云へば人々を菩薩になさんとするのてある、菩薩とは大精神に生きて、上には無限の向上を辿りて崇高なる道德生活に入り、下には大慈悲を有して普く人類を救濟せんとするものてある、儒教の君子とか日本の丈夫と云ふのは菩薩と同じやうの意義てあり、又各々特色がある、要するに菩薩行は崇高にして且つ調節的の倫理を教ゆるものてあります、而して日本的菩薩の精神即ち立正安國の意義を明かにしたのは日蓮上人てある、上人は菩薩の精神を時處位に適應せしめ、大日本國の理想的の菩薩を以て任じて居られたのてあります、從て思想の問題に就て適切なる調節を圖られたのてあつて、眞に模範的大偉人なりと云ふべきてある

▲統一の指針

日蓮主義は統一觀の指針である、日蓮主義は人の名に取るも、意義より云へば統一主義である、例へば天晴地明と云ふ語にしても、其處に明白に宗教と道德、思想と現實との統一の意義を示して居る、上人は佛教家でありながら儒教を研究し皇道を研究して、此の三教融合せられた所の模範的の大偉人であります、日本に於て人文統一の理想を代表する者は實は日蓮上人であります、水戸光圀卿も、教融合の理想を有せし偉人であるが、光圀卿と日蓮上人とを比較するに、佛教の方面で其の研究の淺深は論ずる迄もない、儒教に於ても皇道に於ても光圀卿は日蓮上人に及ばぬ點があります、北畠親房卿も日蓮上人の大信仰者であり、護良親王も法華經を御信じになり、又畏れ多いことでありますが、後醍醐天皇は御崩御に際し、右手に劒を提げ、左手に法華經を御持ちになつて、此の姿を改めずして葬れと御遺勅になつた、今尚ほ吉野の山陵には其の儘の御姿にて靜坐あらせらるゝ事と拜察し上るのである、かゝる次第でありますから今日に於ては此の日蓮主義を發揮させねばならぬのであります

▲理想的國家

理想的國家の主唱者としても、日蓮上人は尤もその魁たるものであります、上人は立正安國論を造られた、立正とは理想の意義である即ち高遠なる理想を國家の中心に置いておし進んで行くのであつて、此の點に於て上人は理想的國家主義なりと稱せらるゝのである

▲歴史的國民性

に就ても、上人は頗る國民性を代表して居らるゝ人である、上人の性格已に大和民族の模範人物とも稱すべきであつて、忠義の精神は特に異彩を放ち、又其の他實行的、活動的、發展的、包容的、同化的精神を完備したる偉人であります

▲調節的道德

に就ては、日蓮上人は宇宙の絶對に對する信仰を有し、大慈悲心を以て一切衆生の救濟を理想し、立正安國を稱へて、大義名分を明かにし、親孝行の方であり、又自己の力量を信ぜし人であり、師に篤く、弟子を愛し、仁禽獸に及んだ、實に調節的道德を體現せし偉人である、宗教的聖者であつて、同時に純忠至誠の國士であります

▲三教の關係

に就ては、皇道に於ける皇室の尊嚴を擁護し、包容の襟度を寛くし、特に敬神の本義に至つては統一神的の教義を鮮明にしたる先覺者であつて、三教を融合調整したる体現者であります

▲至誠

の思想は日蓮上人が頭の座に臨んで泰然自若たりし光景は、眞に至誠神の如きであり、又『至誠不レ動者未二曾有一レ之也』との格言は上人に於て身讀せられ、明德天道の思想は上人の宗教信仰の中に本佛觀、佛性觀と合して大發展をなし、仁の精神は佛教の慈悲の精神と合致して遺憾なく發揮せられて居る

▲大義名分

日蓮上人は大義名分を明かにし、身命を捧げてかの鎌倉の壓制武斷の勢力を恐れなかつた大丈夫である、國士である

權ノ太夫は民ぞかし、壓岐の法皇は天子なり

と叱咤し、又源平二家の勢力を恐れずして

源平二家と申して王の門守の犬二疋候

と明白に我國固有の君臣の大義秩序を示めされて居る

日本國初りてより謀反の者二十六人、……其の第二十六は義時なり

と叱咤して、權勢盛んなりし執權北條の祖先を捉へて謀反人と宣言されて居る

▲國家中心

非常に廣遠なる宇宙的世界的の精神に於ても、其の中心を國家に置くべきを教へ、

我れ日本の柱とならん

と誓はれて居る、如何に北條氏が迫害を加へて、或は頭切らんとし、或は遠島流罪に處しても、上人が國の爲に盡さんとの熱誠は破ることが出來なかつた、又如何に宗教を說いても國家を忘るゝ時は益なきを認め、立正安國論に

國亡家滅者佛誰可崇法誰可尊先祈國家須樹佛法

と嚴誡せられ、世界的宇宙的精神と國家との關係を解

決せられ、儒教の特色なる義の觀念を充分に應用せられたのである

▲忠孝の關係に就ては、上人の一代の奮鬪が實證して居るので、忠孝道德の實行家である

慈父王敵となれば、父を捨てゝ君に參るは孝の至りなり

と云つて居らるゝが、儒教の日本化せし眞髓は實に此の點に存するのであらう、又君が若し無道であつても之を諫ひるのみで、取つて代ることを許さないが日本的儒教である、日蓮上人は此の意義に於て伯夷叔齊の故事を慕ふて身延山に隱遁して居らるゝ、水戸光圀卿も非常に伯夷叔齊を敬慕し、夷齊が西山に隱れた故事に因んで其の隱栖の地を西山と云ひ、自から西山公と稱せられて居るが、光圀卿は日蓮上人の先蹤を學ばれた者であります、又弘毅とか剛壯と云ふ精神は、日蓮上人に於て遺憾なく發現せられて居る今更言ふまでもない、高山博士が上人に感心せられたのは『本より存知の旨なり』の一語である、上人は頭の座に坐つても『本より存知の旨なり』、流罪せられても『本より存知の旨なり』と云つて居らるゝ、博士はこの語に感心したのでありますが、これ卽ち弘毅の精神である、弘毅とは要するに決死の覺悟に外ならんので、松陰先生は

死而後已の四字は言簡にして義廣し

と云つて居らるゝが、上人は不惜身命の覺悟の强い人である

▲信仰と生活

更に佛教の事に就ては申さずとも上人に具備せられて居る、上人は佛教の健全なる方面を代表せる偉人と稱すべく、殊に高遠なる哲學の方面宗教の方面にのみ走る事なく、現實生活との調節を理想せられて居る、或は

御宮仕を法華經と思召せ

武士が君に仕ふるそこに佛教の光りが輝くべきであり

女房と酒うち飲んで何の不足かある

五節句の時も南無妙法蓮華經

と例せられ、常に高き理想信仰を現實生活の上に調節して居るのである、斯の如く日蓮上人は、皇道の精神に於ても、儒教の本旨に於ても、佛教の活信仰に至るまで、悉く一身に体現せられた模範的大偉人であります（統一國日蓮講演、其大意を摘記したるものに足る三上生）

感化

日蓮主義と江川坦庵

海軍中將　宮岡直記

▲日蓮上人と江川家の先代

江川家の祖先は、遠く多田滿冲よりの系統である、而して滿冲の子頼親と云ふ人が江川家の初代でありまして、六代の親治は、保元の亂に崇德上皇に御味方申上げた人であります、當時姓を宇野と稱し伊豆に居を占めて居つた、第十代親信は、頼朝の蛙が小島に兵を擧げられた際、之を扶けて功を立てられしとの事であるが、後十六代英親に至り、鎌倉北條時頼時宗の時代に於て、日蓮上人が伊豆の伊東へ流罪の厄に逢つた時、當時鎌倉在住の江間某とは懇親の間柄にて、同人より英親に上人を頼まれ、屢々伊東に來りて日蓮上人の保護に力を盡し、遂に上人の敎を奉ずる樣になつた、さうして上人も又江川家に參られて法を說かれたので、江川家の大黑柱に火避の御守りとして題目を書し祈誓せられたと云ふ事である、現に七百年後の今日之を保存せられて居る、此建物は保元平治の建物であつて、九百餘年の間其まゝ保存せられて居る、斯かる年代の建造物は神社佛閣を除くの外個人の家として日本の中では見聞した事はないのである、

この英親氏が隱居せられた後、優婆塞日久と云はれて、江川家の附近に本立寺と云へる寺院を建立せられた、而して之が開山として以來、同家の菩提所として二十何代の墓が一所に建てられてある、二十六代英元は天文六年氏綱に從ひ、小弓御所の味方なる里見と鴻の臺に戰ふて威狀を受け、二十七代の英吉は天正十八

年秀吉が小田原征伐の折、氏則を扶けて壺山城に立て籠り、三ケ月の苦心を共にして功績を擧げたるなど、斯の如く同家は祖先以來今に至るまで、利慾や權勢の爲でなく、義の爲に身を犧牲として活動せられたのであるが、代々上人の歸依者であり法華經の信仰家であるから、其日蓮主義信仰の精神が發揮されたるものと認むるのである、其後德川氏に仕へ三十六代が英龍氏であつて、卽ち太郎左衞門と稱し坦庵と號せられたのであります

▲坦庵先生の人格

先生は享和元年に生れ、安政二年の初め五十五歲で永眠せられたのだが、幕末の當時であつたから今少しく長生せられたならば、尙ほ偉大なる仕事を殘されたであらうと想へば、誠に日本の爲には惜しい人であつた、先生の事業を述ぶるに先立ち、個人として修養深く人格の偉大なる點を窺へば、先生は質素儉約克己等の美德を備へられ、夏は蚊屋を用へず、冬は火鉢等の暖を取らぬと云ふ風に、食事は一汁一菜、着物は何つも手織木綿の素服で、江戸幕府の登城にも特に許可を得て木綿着物を用ゐられたとの事である、其管內の巡視或は狩獵等に出掛けられる時はいつも握飯を腰にし草鞋穿にて粗末なる麻陣羽織を着せらるゝを常とせられたが、嘉永二年英國軍艦「マリア」號に海軍少佐の「マヂソン」が艦長で、伊豆の下田へ突然入港して役所の許しもなく、勝手に兵員を上陸せしめ、或は「ボート」で港內を測量する等暴慢なる擧動を爲したのが、幕府に聞えて役人を派し出港を命じた、然るに當時我國の海防の備はらざると、時の役人が外人を恐るゝ樣を見て取りてか中々聞かない、其處で壺山代官の坦庵先生に其談判を命じたが、先生は直ぐ江戸の呉服物の大店に注文して「蜀江の錦」を仕立てさせ、部下の者へも夫々立派なる衣服を着せ、自身は蜀江の錦と陣羽織を着し、腰には金銀造りの大小を帶び、部下を引き連れて威儀堂々の態度を以て、英國の軍艦を訪問したがこの威儀に恐れたのか、又は先生の尋常人に非ざるを

見てとつてか直ちに納得し、軍艦は下田を引揚げたとは歷史の事實である、此錦の陣羽織と平生用ゐられた粗末な麻の陣羽織とが、一つの箱に入れて今尙ほ同家に保存せられてある、其平素質素儉約に係らず、一朝國家の公事に當りて、其金錢を惜まず利用せられたる崇高なる人格の點に付いては、此遺物が生きたる敎育の材料として自分も大いに敬意を以て拜見した次第である

▲坦庵先生の事業

先生が活動せられた嘉永安政の頃は、幕末が外寇の爲に最も苦しめられた時で、英艦の下田に來たについてペルリーの浦賀に來り、露國「プチアーチン」が下田に來る等、國內では尊王攘夷鎖國開國等の議論が中々やかましく、いづれも愛國の精神より出てたるものなるも、攘尊王攘夷鎖國開國いづれの主義を達するにも、實力があつてこそ初めて其主義も達せられ、其議論も行ふ事が出來るが、如何せん、世は三百年來の太平になれ武陵桃原の夢を破られたのも同樣、何等實力としては皆無である、一隻の軍艦もなく、用に應ずる大砲兵器は勿論、個人の氣力としても、當時幕府の干城と賴む旗本武士が、義太夫や長謠を稽古すると云ふ風に墮落し、世は一般に個人の氣力をもたのみにするに足らんと云ふ樣な有樣なれば、先生は先此實力と云ふ點に着眼せられた樣であるが、前にも述べた通り世に阿りて質素を標榜せられたのでもなく、當時狩獵等に出掛けられ、これ等も軍隊の編成を以つてなされたとなれば全然當時の士氣を鼓舞し、護國の任に耐へしめんとの念より出たと考へらる、殊に其實力の主たる兵器の製造に先着せられ、種々苦心の結果、鐵を鑄る反射爐を創設せられ、我が國にて初めて大砲を製造せられたのであるが、（黃銅青銅の大砲）此造砲所が江戸に移され、再び維新後小石川の造兵廠となつたので、取りも直さず小石川造兵廠の前身である、是が後にこわれ〳〵にならんとしたのを、近年陸軍省より特に金を出して修理し、此遺物を大切に保存する事とな

り、此紀念祭には陸軍大臣を初め諸名家が集られた事がある、是が先生の造られた煉瓦の遠砲の盧と見れば其だけてあるが、先生が、常に法華經の信者として、日蓮上人の歸依者として護國の信念より其精神が實現せられたるものかと考へる時は、此遺物が立派な伽藍や奈良の大佛樣のそれよりも尊い心持がして頭がさがる、是は日本の紀念物としてのみならず、世界の紀念物とする價値があると想ふ、又海防の事に付ては、當時先生は、幕府の當局者に種々建策せられ、品川の台場や房總の海岸に於ける種々の設備もあるが、先我が國の海軍創設として先生に重きを置かねばならぬと言ふ事は、安政元年十月の頃か、露國の「プチアーチン」と云ふ中將がダイヤナと云ふ軍艦て、ペルリに付て通親條約の使節を兼ねて下田にやつ一來たか、不幸にも談判最中、十一月幾日かの海嘯の爲に沈んてしまつた、當時クリミヤの戰爭中て乘込員を早く本國へ送り歸す必要があるので、幕府と交渉の末、此方より職工を送り伊豆の戸田港て、露人の知識を借りて純粹の西洋式て二艘の船を造つたが、先生には此造船の技術を我が職工に習はせるのに非常に苦心盡力せられたので、當時此式に依つて出來た船を君澤型と稱へて、我が國の西洋造船術の起原てある、固より大船として朝日丸昌平丸等前後に出來たものもあるが、是等は大きな船と云ふ歴史上の事實だけて、彼の國の軍艦に對抗し樣と堅固なる西洋型に依り實際に造つたものてはない、勝海舟先生が書かれた我國の海軍歴史に、日本の海軍の起因は、造船てあると云つて造船の劈頭に戸田て造つた船の事を云はれ、我が海軍の創設に付いて最も重き起因となつた事を述べられてある、又安政の後、長崎に海軍練習所と云ふ樣なものをおかれ、和蘭人を雇ふて幕府より是が練習生を送られた人々の内て、肥田濱五郎望月大造と云ふ樣な錚々たる人は、皆先生と緣故のある人て、又後に佛人を雇ふて横須賀に造船所を創設せられた折に、是が技術者の重なるものは、多くは此戸田の造船所に從事したものが、主となり是を敎へ是を指導したとの事てある、固

より今日の横須賀造船所に達する迄は佛人の力もあらうし、以來是が局に當つた人の盡力にも依らうが、其甚礎の創設には先生の功は沒すべからざるものてある是等が起因となりて官立私立の造船所となり、追々發達して明治の御代に至り日清日露の二大戰役に數萬噸の軍艦・船が、偉大なる偉力を發揮して護國の任務に應じた事を考へ、又前の反射爐が前身となりて小石川の造兵廠が、何千萬の小銃其他の兵器を作り出して滿洲の野に偉力を呈し、いづれも護國の任務に應じたる此功果、其因緣に付て深く之を考ふる時は、上人が法華經の行者として御說きになり、御實行になつた護國の精神(我れ日本の柱とならん)、此の形而上の靈魂精神が、代々江川家に於て形式を異にし活動が實現せられ、又代々の信仰が因となりて緣となり、坦庵先生となりて反射爐となり伊豆の造船所となり、明治の御代となりて是が又因となり緣となりて小石川造兵廠となり横須賀造船所となり、遂に是が果となり報となつて此二大戰役になつて偉大の功果となりて實現したものとせば、是が取りもなほさず久遠連續の靈てあつて即ち不滅の大生命である、護國の念より云ふ時は大和魂とも云へる、(普偏我又は佛性)是は日本人としては相互に共通てあつて、いづれも心のどん底にあるはずてある、然し是を發揮せず向上せしめず、底にしまつた儘ては生命ても靈てもない、是大生命を發揮せんには、先生の如く信仰の出發點より修養を宗として、かくの如く崇高なる人傑が出來、其が因となり緣となり前述の如く偉大なる功果となれば、先づ先生に倣ひ自分即自我を次とし何事に依らず第一に犧牲的の考へを以つて(天意に從ふ神慮に叶ふ佛が見て御座る)と云ふ眞心を以つて、上人がお說きになつた人格ある絕對の佛陀、即ち唯一の本佛に絕對の信仰を捧げて是を出發點とし常に本佛を心の鏡とし各自の業務職業に應じ人生あらゆる處世の途に是を實行する事に務めたならば事の大小に關せず、是が因となり緣となりて小は一身一家の上に於て、義ある活動となり多大の幸福となりて實現し、大は國家社會の上に前述の如く偉大の功果を現はすと云ふ事は固く信じて疑はないのてあります

教義講伝

開結二經の研究（二）

井村日咸

無量義經（續前）

▲此經の超人觀

これから此經の各品に就て御話を致さうと思ひます、先づ德行品は超人觀の說示であります、此品には經家の敍述として、先づ菩薩の德行を讃歎して、因位の諸菩薩の德行の圓滿なるを知了せしめ、進んで此等諸菩薩の讃佛の辭に依つて、果位の佛陀の德行の圓滿なるを示し因位果位互に其德を比況して、深く其德行の完全なるを吾人に認識せしめたのは、此品の特に勝れる所であらうと思ふ、左に菩薩の德行を圖示しますと、

菩薩（因人）
- 理法……体（所證）
- 人法……用（能證）
- 目（能說）
- 教法……他（所說）
- 性德法身（法）……歎所成就身……莫不皆是法身大士　二、頁　九、行
- 修德法身（報）……歎能成就身……戒定慧至之所成就　仝　仝
- 福智二嚴（應）……歎定慧二德……其心寂寂至明現顯白　三、一、
- 口輪說法……歎五味說法……又能善知至救苦衆生　仝　五、
- 身輪化益……歎利他十德……是諸衆生至難可沮壞　四、四、
- 行法……因位萬行……歎四弘六度……遊戲菩薩至廣淨佛國　五、三、
- 果法……果位萬德……明金剛心位……不久得成至三菩提　仝　四、

歎德行　無量義經德行品　縮刷妙法華經

右は大体に於て分類致したのでありますが、特に注意すべき點は、一菩薩を主題として、其菩薩の一身に、眞理も、智慧も、功德も、敎法も、證果も、凡てのものを引羅めて、之を見て居るのは、法華經の迹門の極說たる人開會の法門に適合致して居るものと思ひます、夫に佛陀の德行に就ても同樣の意味に顯れて居ます、

佛陀（果人）
- 總歎（三身即一身）（應身論三）……
- 別歎（一身即三身）
  - 理法……体（所證）—理身（法身）
  - 人法……用（能證）
    - 智身（報身）＞意輪
    - 悲身（應身）—身輪
  - 結三身即一身—自（能說）
  - 教法……他（所說）——口輪
  - 行法……
  - 果法……

歎德行　同品讃佛偈　縮刷妙法華經

- 總歎佛身……大哉大悟至陰入界　四行　七、頁　二、行
- 歎內證身……其身非有至種種色　六行　七、六、
- 歎修法身……戒定慧解至因緣出　二行　八、三、
- 歎四八相……示爲丈六至妙色軀　十四行　仝　五、
- 歸敬歎……今我等八至難思議　四行　一〇、一、
- 歎法輪……梵音雷震至緣諦度　十一行　仝　五、
- 歎因行……世尊往昔至衆生根　八行　二、七、
- 歎果德……是故今得至諸難勤　二行　一三、七、

此圖と前の菩薩の圖と御引合せに相成れば、前に申上た因果互顯の意味のあることは、お分りに相成らうと思ひます、佛陀に就ては、佛陀の一身に、眞理も、大智慧も、大功德も、一切を具足せるものなることを示し特に總歎の文と歸敬歎の文に於ては、今將に說法を爲さんとしつゝある佛陀、卽ち應身の佛陀に對して、大哉大悟大聖主の讃辭を捧げ奉りて、此應身の佛陀が眞理の体現者であり大智慧の發現者であり、大功德の成辨者であることを認めしめたのは、佛敎佛陀觀上の最も深義の存する處であります、これに就ては、

▲佛教の佛陀觀

を大觀せねばなりませぬが、一口に『佛陀』と申せば、至極簡短でありますけれども、佛教諸經論の上に顯はれた佛陀觀は、甚だ繁雜を極めたもので、流石博學の村上博士をして、多岐亡羊の歎を爲さしめた程、分り難いものであります、一身、二身、三身、四、五、六七、八、九、十身等に分かれ、且つ又ソレガ幾通りもある樣な譯で、名前丈でも覺え難くありますが、最も普通に用ゐられて居るのは、法、報、應の三身說であります、法身は理佛で、眞理を指して云ふたもの、報身は此眞理に契ふた智慧を指すのである、應身は法報二身の契合に依りて成立したる本体より、衆生化導の爲めに垂應示現の現身佛を指したのでありますが、此三身を隔別のものと見て、各其一邊に執して、佛陀を見て居るのが法華經以外の諸經の佛身觀、天台大師已前の諸師の見解であります、天台大師已後にも、此隔別の見解を取つて居る宗派もあります、眞言宗の大日如來は法身の理佛、華嚴の佛の報身如來、阿彌陀如來も報身佛と云ふて居りまするが此等の三身隔別の說は佛陀の隨他意語で、方便權假の說で、如來の本懷では無い、無量義經の『四十餘年未顯眞實』の分齎でありますから、佛教佛陀觀の根本義と認める事は出來ません、然らば

▲佛陀觀の根本義

は何かと申すならば、法華經本門壽量品に顯說せられた佛陀觀であります、壽量品の佛陀觀の諸經に異なる點は、(一)三身卽一身、(二)應身常住、(三)本佛、の三點であります

始に三身卽一身論は、壽量品已前の諸經に三身隔別の見を以つて佛陀を見て居つたのを、壽量品の始に、汝等諸ニ聽ヶ如來ノ秘密神通ノ之力ヲ、と說いて、從來の隔別の見を破せられた、天台大師は、此文を釋して、『一身卽三身なるを名けて秘と爲し、三身卽一身なるを名けて密と爲す、又昔說かざる所を名けて秘と爲し、唯佛のみ自ら知しめすを名けて密となす、乃至佛三世に於て等しく三身あり、諸敎の中に於て之を秘して傳ず』

と釋せられて、壽量の開顯は三身卽一身と開顯するので、此の說は諸敎の中に秘して傳へざる處と判釋せられたのであります、然し天台大師は、三身卽一の一身を、報身佛に取つて居らるゝのは、日蓮聖人の同意し給はざる處であります、日蓮聖人の御主義は此一身を應身に取り、應身を中心として、應身の上に三身を見るのであります、此は第二點の應身常住論を明白に致しましたならば判明致すことであります

次に應身常住論は、日蓮聖人が開目抄に『法華前後の諸大乘經、一字一句もなく、法身の無始無終は說けども、應身報身の顯本は說かれず』と申されてある通り、壽量品の顯本は報身應身の無始無終を說き給ひたるものであります、壽量品に顯說せられたる、釋迦牟尼世尊の三世常恆の不斷の敎化は、正しく應身佛の活動を顯示したるものにして、理佛智身の無形の化益にあらざることは、經の本文重々に之を說示して明白であります

又本佛開顯の說は、寶塔の遠序に、分身來集の事ありて、遠く顯本の原由を爲し、涌出に地涌の出現に依つて、其近由を爲し、十方分身の諸佛を押へて、或說己身他身、或示己事他事と示し、名字の不同、年紀の大小等と說いて、皆釋迦牟尼佛一身の化益に外ならずと結し、佛敎諸經に顯說せられたる諸種の佛陀を齎しく此れ本佛の示現なりと示して、其統一の本源を示されたのであります、此に於て佛敎の佛陀は、統一の趣を得て、一釋尊の中に統攝せられ了つて、曾つて多岐散漫其適歸を知らざりし佛陀觀は、最も明了に爲つたのであります、此が佛陀觀の根本義であります、そこで、此

▲佛陀觀の根本義と無量義經の佛陀觀

とは如何云ふ關係に成るかを見まするとと、此經の佛陀觀は、圖中に表示致した如くに、應身中心の三身卽一論であることは、本文を熟讀致せば明白に會得することが出來ます、此經に讃歎せられた佛陀は、決して三身隔別の見に立つて居るものでは無い、壽量品は三身卽一の義は充分にありますけれども、經の文面として

は、此點は簡短でありますが、此意味に於ける實際の佛陀觀としては、寧ろ此經の讃佛偈が、其意を盡したものであらうと思はれます、特に應身中心の三身卽一論は、壽量品の已前の說としては、不思議に思はるゝのである、然し此經の佛陀には、久遠の生命と統一の實證の集い事が、缺點であります、此は止むを得ざる次第であります、故に壽量顯本の後に、振歸つて此經の佛陀に、久遠の開顯を附加致しましたならば、眞實の圓滿完全なる佛陀と相成るのであります、此意味に於て、私は此經の佛身觀を推稱致す次第であります、佛身觀に就て、現日蓮主義者の誤謬は、(一)三身卽一の意義を了解せざること、(二)應身常住の旨致を了せず、法身常住の說に陷れること、(三)天台の說に囚はれ報身常住の說に泥み居ること等が重なものであると思ふが、若し佛敎者として佛陀を意識することが不透明であつたならば、終生經藏裡中に沒頭するとも、遂に佛敎の何物たるを知ることは出來まいと思ふ、學佛の諸士希くは此點に留意せられんことを、佛陀觀に就ては詳細の事柄は他の書に讓り、此經の特徵のみを御話し申した次第であります、それから、德行品の歎德が、因位の菩薩と、果位の佛陀とに就て、因果互に舉げて其德を歎美した事は、佛敎に於ける

▲人身觀

の極處を發揮したものであると思ふのであります、凡そ人身觀の極處と致しましては、神人合一を論ずるものであります、基督敎が哲學より、不合理のものとして取扱はるゝのは、神人の合一を說かざる故であります、佛敎特に法華經は、佛陀と吾人の不二を說ので、人身觀の妙處を發揮致して居ります、此經も、菩薩の因人と佛陀の果人とに於て、其德行卽內容の不二なるを說いて、因果不二、卽ち神人合一の理を示して居ります、此說は佛敎人身觀の最極にして、是基督敎が佛敎に及ばざる點であります、前に揭げたる圖表に就て子細に經文を研討せられなば、其意義は會得せらるゝ事が出來やうと思ふのであります(以下次號)

前號の誤植の主なるもの　四八頁上段七行「云へる文」は「云へる文」全十二、「劉順居士」は「劉乾居士」四九、上、九「是」ハ「如是」全、一五、「象」ハ「象」全、下、二、「經宗の善法」ハ「經家の善巧」五〇、上、二、「相傳の益」ハ「相待の益」五一、下、四、「如說」ハ「所說」の誤に付訂正す

實驗信仰

日蓮主義信仰の實感

藥學得業士　金澤嚴

予は青年時代岡山の醫學校に居つた當時、實兄が京都の同志者に學んで居つた關係から、屢々基督敎の說敎を聞いた、けれども予は基督敎の主義が何だか氣に喰はなかつた、さうして遂に其主義に入るべく思想を動かすものがなかつた、而し基督敎の傳道方法の熱心なるには感心する所がないではない、されども我國の多數人を支配するの勢力とはならないが、是卽ち國民性に適合せざるが故であらうか、予は近來日蓮主義の研鑽に從ひ、其卓越せる敎義の一部を味ふて信仰に入ることを得た、爾來精神の內面には不安などは無くなつて、殊にそれが實際的に日常の生活に味識することの出來る樣になつた、實例としては、旅行などをすると家族の事を心配して安眠することを得なかつたこともあるが、信行に住し題目を唱へる樣になつてから、心を安んじて旅行も出來る樣になりました、私の意識に映る信仰の功德は、凡ての幸福が事實的に發現して來るものと信ずる、從來幾分なりとも悶え苦しみのあつたものが、事實上安心の出來る樣になつたのは功德であつて、それが卽ち精神的に利益を受けたものであると考へられる、

西洋の學者が迷信は力なりと云つたが、全然理義を缺いた迷信は風敎上許すべきものでないけれども、信仰の熱烈なる高潮を指して迷信の文字を以て表はすとせば、この度合まで突入せねばなるまいと考へるのである、故に信仰は道理の基礎に立つて狂熱的でなければならぬ、如何なる難問題に處しても、信仰の力を以て之を超越し、飽くまで貫く底の勇氣あるを要する、故に日常の行爲に就て、守るべき信條を定めて最善の形式を採ることが肝要である、世には信仰は萬善萬德を收むるものなれば、國家社會上の倫理的行動には相關せずと云ふものもあるが、それは日蓮主義の信仰の本義でないと思ふ、天晴地明の主義が日蓮上人の根本理想であることは、動かすべからざる定論でありますから、從て地上の倫理實踐に就ては、大

に模範的活動を爲さねばならぬのて、單に自己一人の安慰を得て滿足すべきものてない、唯だ自己と佛陀との關係なりとの觀念は獨善的思想て、小人の根性たるを免れぬ、宗教は個人對絶待の關係には相違ないことてあるが、自己が信仰に因りて佛陀と接觸したる上は、他に向つて自己と同一なる信仰生活に入らしむべく努力することが、信仰家としての第一要件てあるとおもふ、法華經の勸發品には、四法と云ふことが說かれて居る、即ち『發二救一切衆生之心』と云ふことは、救濟的活動に努むべきを警告せられたものと拜察する、而かも信仰の精神を以て人事百般に應用活現するのは、それが信仰の功德を積む所以てあると考へられるのてあります、吾人が佛樣に現實の問題を願ふのは何となく恥づかしいやうてはあるが、吾々の平和なる生活をして居る事が、佛樣の愛護に依ることと感謝し敬仰の意を表するは惡いことてはあるまい、朝夕の動行に家內安全子孫長久を祈るのは、現當二世の祈願を爲すのてあつて、信仰の內容意義に於て誤りはなからうとおもふ、而して日蓮主義の信仰は、其淵源する所法華經を透ふして表はれたるものてある故に若し大乘非佛說論が、歷史考證の整足したる場合は如何にすべきてあるか、現に日蓮主義者にして明かに大乘非佛說に左袒するものがある、されどもそれは何等の考證說明を與へて居らぬ、果して大乘は佛說てないのてあるか、然らば其意見を發表して大乘佛教に對する地位を明かにすべき責任があると考へる、

漫りに非佛說なりと唱ふるが如きは吾人の採らざる所、日蓮上人は法華經を佛說なりと確信したる上、之に依て色讀法華の大活動を爲されたのてあるから、大乘非佛說はこの根本觀念を滅却することになりはせぬか、吾人の深く憂ふる所てある

さはあれ、予は實在不滅の本佛を仰ぎ、日蓮上人の遺文を透ふして活ける信仰をにぎれば足れりと信ずるものてある、上人の一代に於ける實驗的信仰は、吾人の精神に大なる刺戟を與へて活動の力となる、從てこの活信仰に勵んて救濟的活動に力を致すべきことゝ信じ、常に佛恩に感謝して居る次第てあります

日蓮主義の護威

時弊と教育

陸軍少將　小原正恒

現代の文明の狀態を觀ますれば、各方面共に善良なる針路を與ふるものあるは勿論の事てあるが、精細に調査を遂げて考へますること、亦甚だ時弊と認むべき惡い傾向があるのてあります、晩近科學の進步は唯物主義に偏せしめ、個人本位の自利主義に走らしむる樣になつて來た、延て道德上の判斷を輕んじ、信仰心の衰頹を招くに至り、惡風潮は人心に浸み渡りて將に毒の爲に蝕れんとするの有樣てあるお、特に我々軍人の立場より考へて、憂慮に堪えないのは皇室に對する觀念てある、玆に新たに申述ぶる迄もないことてあるお、我

▲國体

は上には萬世一系の皇室を戴き、下には忠良の臣民を以て結合されたる世界無比の帝國てある而して君臣の間に大義名分の明かなるものあるは勿論、又其關係は親密てあつて、其情緒の濃かなるは父子の如き有樣てある、而して此精神的關係は建國の當初より遺憾なく發揮せられて居る、故に國民は億兆一心の美風を存し、協同一致の念に厚く、有史以來數千年の久しきも未だ曾て他國の凌辱を受けた事のないのみならず、屢々罪を外國に問ふて國威を八紘に輝かして居るのてある、我々は此上とも國恩を感謝して皇威を發揚するに努めなければならぬのてあります、吾等愼んて建國の理想を拜仰するに、夫れ天位は神勅に依て定められ、此豊葦原の瑞穗の國は神の子孫の知しめし給ふ處として天壤と共に窮り無からんと詔らせ給ふてある、是れ國体の淵源てあつて又精華てある、而して我帝國は、天業を恢弘し六合を光宅すべき絶對の權威を有する、宏遠なる理想的國家てある、されば日蓮上人は、我理想の國家が法華經の眞理に合する處より、我國は『一閻浮提八萬の國にも勝りたる國ぞかし』と云ひ、此國の臣民として生活するを無上の幸榮なり

と悦ばれたのてある、然るに近來我國体に就て異說を唱へるものがある、此等の輩は我國体の何物たるを深く解せずして、妄りに泰西諸國の憲法論を採て直に我憲法に擬せんとするもので、帝國の大權が皇位にあることを否定し、君主を以て單に統治の機關に過ぎずと論ずる學者がある、之等は泰西の學問思想に心醉して仕舞つて日本建國の本義を破壞するに至るをも知らざるものてあるが、斯の如きは尤も恐るべき時代の弊風てあつて實に吾人の憤慨に堪えざる所てあります、惟ふに我國數千年來の

▲歷史

てはない、既に日蓮上人が大義名分を絕叫して、『謀反の者二十六人あり第二十六番は義時なり』と叱責を與へて居らるゝ位であるが、未だ曾て天皇に統治權なしと云ふが如き暴言を吐いて、建國の体制を根底より打破らんと企てたる者は一人も無い、然るに何事てあるか、如何に自由研究は時代の潮流てあるからとて、深謀熟慮の研究を積まず、國体の因て來る所を探らずして、徒に時弊に投じて其名を賣らんとするが如き思想は、根本的に退治せなければならぬと考へる、彼の西洋諸國に於ては民本主義てあるから、天皇に統治の大權を認めずとも差支ないかも知れぬが、然れども吾國に於ては斷じて許すべき思想てない、西洋に適當てあつても日本及日本人に適するものてない、日蓮上人は『彼國に好かり法なればとて、此國にも好かるべしと思ふべからず』と仰せられて居るが、眞に千古の格言てあると信ずる、又近來は

▲個人主義

の思想が、非常の勢を以て人を利己主義に走らしめ、萬事自己を本位として何事ても決すると云ふ風潮になつて來たのてありますが、この自己を利すると言ふことも、道理を根據とするものてあるならば差支はない、卽ち自己の身体を練り自己の知識を磨き自己の德性を養ひ、以て個人格の完全要素を具ふるに至り、而して此個々の人民結合して國運を發展せしめんとするが如き、高潔深遠なる思想てあるならば寧ろ歡迎して已まざる所てある、元

來人は社會組織の一要素てある、從て其道德知識体力の優劣は悉く社會に影響を及ぼすものてある、而して孤獨以て其責任を完ふせんことは殆んど爲し得べきことてない、されば相互の經驗と知識とを交換して知德を練磨するの必要なることは固より論を俟たざる所てある、敎育勅語に『智能を啓發し德器を成就し一旦緩急あれば義勇公に奉し以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし』と云ふ趣意に副へる個人本位の修養は、國民の奢しく奉戴すべき敎訓てあります、勅語の上に現はれたる趣意は、自己と國民、自己と國家、自己と社會との關係を融合したる上に於ける個人格の尊重なりと拜察するのてありまして、單自利主義の思想を誡められて居るのてあります、然るに今日の個人主義は、善意を以て見ましても支那人の如き態度てあると謂はねばならぬ、支那人の個人主義は足一たび支那の國を蹈めば解るのてありますが、第一に驚くのは道路てある、支那には道路として見るべきものがない、故に個人の有する車輪の製造方は頗る堅牢てあるけれども、道路泥濘なるときは車輪の半部も埋沒することがあるにも拘はらず、道路の工事を爲すものがない、之等は極端なる個人主義に囚はれて協同一致の動作を爲すことが出來ないからてある、されば支那人が如何に蓄財本位てあらうとも、其生活狀態は恰も螺の如きものてあつて、太平を謳つて樂觀的に考へて居つても、强者のために烈火の上に載せられ、家は燒かれ身は喰はれると云ふ悲慘の境遇に至る、歷史は常に之を繰り返して居る、之等は國政の上に關係する所多いけれども、思想上の缺陷があるからてある、顧みるに維新の際、泰西の科學に心醉せし學者輩出して個人主義平等主義を唱へ神聖なる國体善美なる風俗を非難したる者も亦尠なくはなかつたが後年漸く其非を悟りて改悛の意を表したのてあるけれども、人心に與へたる惡印象は取り除くことは出來ない、古語にも「萬里の長提も蟻の一穴より崩る」と云ふことがあつて、決して樂觀的に看過すべき事てない、何うしても健全なる風潮の指導によりて、國体を尊重し道義を實行する樣にせねばなら

ぬのである、然らざれば國運を發展せしむることが出來ぬ、凡そ國家の消長は主として國民の道義の實行に存する、如何に深遠なる學識を有し强健なる体力を具へて居つても、道義の觀念もなく思想又高潔ならざるは、其行爲は自己を欺き社會を害するものあるべき筈がない、されば吾人は知識を磨き体力を練ることを怠るべからざると同時に、大に修身の道を講ずることを心懸くべきである、某博士の說には、道德心に薄き人が社會へ立て活動せんとするは、恰も猿猴の芝居するが如しと云はれたが眞に適評と謂ふべきである、元來

▲智德体

の三育は鼎足の如きものでありまして、若し其一を缺かば必ず顚覆するであらう曾子曰く「吾れ日々に三度吾身を省る人の爲に謀て忠ならざるか朋友と交て信ならざるか傳へて習はざるか」と云ふてあるが、蓋し忠とは己れを盡すの謂ひであつて、卽ち人の爲に謀るときは、苟も心を盡さざる處なく、親切にして自己の心に滿足するに至て始て己れを盡すと云ふべきである、信とは實を以てするの謂ひて、卽ち朋友と交るに決して虛飾迎合等の事なく、心底より信實を以て交るの意味合である、傳ふとは父母師より傳へ受けたる敎訓、又は書籍等に由り或は日常善行者の行爲を見聞して心に感じたることを謂ふので、習ふとは前述の傳へ受けたる敎訓を毫も等閑に附することなく心を用ひ力を盡して日常の行爲に應用して善く行ふて習熟するを謂ふのである、吾人は斯かる

▲敎訓を色讀して其行を三省し、自己活動の源泉たる心を正しくするならば、勅語

に宜べ給ふ「億兆心を一にして世々厥の美を濟し得べし」との聖意を躬現することが出來るのである、日蓮上人の仰せに「異体同心なれば萬事を成じ同体異心なれば諸事協ふことなしと申すは外典三千余卷內典五千余卷に定りて候殷の紂王は八十万騎なれども同体異心なれば戰に負けぬ乃至日蓮が弟子の中に同体異心の者これあらば例せば城兵として城を破るが如し」とありますが、實に團体結合の上に適切なる訓戒であります

るのは言ふまでもなく、苟くも日蓮主義を鑽仰する者は異体同心の聖訓を躬して國家を擁護し、妙法の光輝を宣暢して思想の革正に全力を竭さなければならぬのであります、けれどもそこに確然たる規律の存するものがなければならぬ勅諭に宜ふ如く「心だに誠あらば何事をも成るものぞかし況して此の五ヶ條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し」とは、誠心の力は偉大にして、百般の問題を遂行し得べきことを敎示せられたのであります、此誠心や軍人のみに限るのでない、實業家敎育家將た宗敎家の缺くべからざる根底である、然るに漫りに時弊に囚はれて氣節なく誠意なくして虛僞の生活を送るものが多い、從て一時の苟安を偸んで大事を謬るものあるに至る、實に慨はしい次第である、吾人は斯かる現代に於て日蓮上人の大精神に接觸するを幸榮とするのである、上人の開目抄に曰く、「大願を立てん、日本國の位を讓らん、法華經を捨て觀敎等について後世を期せよ、父母の頸を刎んと念佛申さずばなんとの種々の大難出來すとも、智者に我義を破られずば用ひじとなり其外の大難は風の前の塵なるべし、我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん等誓ひし願やぶるべからず」と實にその抱負の雄大なる熱誠の牢乎たる、眞に摸範的大偉人である、吾人が敬虔なる態度を以て鑽仰する所以亦爰に存するのであります、予は封建時代に生れたもので、讀書習字劍術、鎗術馬術等を習つたが、當時の敎育は主として

▲精神敎育

に力を用ひたのである、特に言を以て敎ふるよりは行を以て導くの法を取つて居つた、されば何れも意思を鍛錬し武士道的氣風を持つて居つたのでありますが、今日斯の如き心得を以て能く人を敎育し感化する者がありませうか、予は曾て陸軍幼年學校の中隊長を勤めた事がある、幼年學校は陸軍將校となるべき生徒を養成する處であるが、特に精神敎育に重きを指き、未だ腦醬の固まらざる幼少時代に於て、善良なる軍人精神を陶冶して他日良將校となす爲に校附將校は自ら模範を垂れて敎導誘掖す

るのである而して此の軍人精神と云ひ大和魂と謂ひ武士道と謂ひ至誠に歸着するものと思ふ、この至誠の念

▲我國維新

の當年と現代とを比較考察するに、今は甚だ豐富ならざるものあるを憂ふのである、彼のコサック從軍記には、今日日本の國威隆々として旭日昇天の勢をなせし原因は、所謂大和魂武士道の精華に依るものなりと非常に稱揚して記載し、其結文として左の意味の一節がある、日本軍現在の高等司令部を觀察するに、長官は概ね封建時代に生れて、所謂武士的教育を受けたる者なれば、新知識には乏しきも大和魂に富めり、其幕僚は之に反し新知には富めるも大和魂は前者に及ばず、之に由て之を觀れば、此日本國の隆盛が　明治天皇陛下御一代に止まらざれば日本帝國の爲幸福と謂ふべしとあるが、此觀察の當否は暫く措いて、慥かに一の警告に相違ないと考へる、斯く大和魂の衰退などとの評論の起る原因は維新の際知識を求むるに急にして殆んど德育を省みず儒教は陳腐なり佛教は廢すべしなどと極端に走り、新禮未だ行はれずして忽ち舊禮廢たれたるの間隙に乘じ即ち耶蘇教再興（寛永年間に蔓延す）し盛に個人主義や極端なる博愛主義を輸入し、甚だしきに至ては我國体の尊嚴を傷害するの言動をなし、以て我思想界に一大變遷を來せる等、數へ來れば種々あるけれども、我上流社會の人士之が傷を作りしは蓋し最大原因と謂はなければならぬ、凡そ洋の東西を問はず國民の特性を傷け風俗を害するものは、中流以上の社會にあるを常とするので、現に露國に於ても然りてあつて、徒に表面的文化に醉ふて露國の生命たる信仰心を失墜しつゝあるに乘じ、科學萬能や社會主義を注入して國民精神の安固を傷ふたから、今一を轉回せんが爲に單に宗教の奬勵のみを以てしては實効を期すること難しとし、更に國家的觀念の養成に待つべしとの主張の下に、特に忠君愛國の思想を涵養することに努めつゝあるは事實てある、爰に其一二の例を擧ぐれば一昨年露國皇太子の病狀一時危うかりし時は、全國民は熱心に病氣平癒の新禱を行ひ、或は、昨年ロマノフ家統治三百年紀

念の爲に政府が皇帝の像を印刻せる郵便切手を發行せるに際し、某所の郵便局員が皇帝の像に捺印するに忍びずとて之に反對したるに因り、遂に沙汰止みとなりたるが如き、我國民が皇室に對し奉ると精神は異るも亦美しき性情の發露と見得られるのである、又彼の露國少年隊の奬勵の如きは、一面には体育奬勵てあるけれども特に重きを忠君愛國心の涵養に措くものてある、其他祖國戰爭（奈翁擊退）百年祭に當り、當時國難に殉せし將士を篤く吊ひ、或はロマノフ家統治三百年に際して露國の偉大なる歴史を國民に敎ゆることに努めて居る、日露戰爭の失敗は露國として一大打擊に相違ないけれども、亦國運發展に資する所大なるものがあつた、即ち憲法を布き教育を奬勵し軍備を擴張し而して今や着々國民の文化と國軍の整理とに努力し、以て天下の變を侍つものあるが如く見ゆる、然るに之に對して吾國

▲現下の大勢

は何うてあらう、戰後既に十年、此間に國力は如何に發展するものがあつたか、國民の思想は戰前に比して如何なる狀態にあるか、思想界の混亂は其極に達し、殆んど敎拾し得べからざる危險なる有樣てはあるまいか、故に教育は特に重きを德育に措き、且爲し得る限り教育の精神と宗教の精神とを連繫し、依つて以て亂れたる思想を矯正し、道德反信仰心の養成に全力を盡さなければならぬと思ふ、露國に於ては學校に於ても宗教の力を藉りて修身科を設けない、之に代ふるものは聖經の講義てある、故に戰爭當時の彼の捕虜中にクリスマスの時二十四時間斷食して跪き禮拜したるものもあつた位てあるが、然れども本邦に於ては各宗其宗義を異にするのみならず、中には頗る不健全なる宗教もあるのてあるから、之を能く撰擇し洗練することを忘れてはならぬ、唯々吾人の信ずる所は、從來の因はれたる形式教團の日蓮宗てない、日蓮上人の理想を根據としたる日蓮主義は、國民一般が之を奉じ實行して有益てあると考へる、吾人は一誡以て勅諭及教育勅語を眷々服膺し、死力を盡して金甌無缺の國家を擁護するの責務がある、又之を光榮として活動實行を要する、日蓮上人の實相抄に云く

行學の二道をはげみ候べし、行學たへなば佛法あるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行學は信心よりおこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給べし南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經恐々謹言

百學の二道を簡ちべし

法華經中の文意に對する質疑

▲辯護士鈴木充美君の質問

拜啓昨日は久々にて拜顏仕り候處不相變御健勝奉賀候、其節は貴重なる高說拜聽難有感佩仕り候、扨爰て御敎示を蒙り度存居り候事有之、昨年夏頃八代中將にも小生疑問の要點を述べ、上人猊下の御敎示を願度旨相談候處、其當時猊下には御旅行中の由に付其後時々は考出候得共、何分未だ機運に際會せざるものか、其望を遂げざりしに、昨夜拜顏鳥渡大要を申述べ御敎示を願度旨申上置候處、斯の如き事は思付きたる時に其事を遂げざれば、又々時期を失するものと考へ候間書面を以て御願申上候は如何にも失禮千萬に存し候得共何卒御敎示を蒙り度願上候、尤も御敎示を仰ぎ候事は、追て參堂直接拜顏の上に可御願心算に候へ共兎に角質問の要旨左に

小生儀二三年此方佛敎典(主として經文)を廣く拜讀致し居候處、孰れの經文に對しても同一の疑問を生し候點有之候、其要旨は孰れの經文にも必ず『此經讀誦云云其功德云云等』の如き章句ありて、其所謂此經云云なる此の字は何を指したるものなるか、若し此の字が其經文中の一句一文等を指したるものとせば、其功德を稱擧する章句は其經外と見ざる可らず、又廣く全部を指したるものとせば、其功德を述ぶる部分も亦其內に包含せられて普通の文章普通の言語としては殆んど其躰を爲さず、玆に法華經中にある實例二三を擧げて具体的に質問せんに、見寶塔品に曰く

十方世界在在處處若有說法華經者彼之寶塔皆涌出其前

此文は即ち法華經なり、然らば『涌出其前』と云も亦法華經なり、然らば卽ち特に『有說法華經』とある法華經なるものは、何を指したるものなる乎明かならず

又曰誰能於此娑婆國土廣說妙法華經今正是時云々

前段疑問の如く、『廣說妙法華經』と其說夫れ自身法華經なるに、法華經として特に何を廣說する乎

從地涌出品――護持讀誦廣說此經佛說是時娑婆世界三千大千國土地皆震裂而於其中……同時涌出云々

此經とは何ぞ、說是とは何ぞ、從地涌出の事實を說示するは卽ち法華經にあらずや、然るに特に此經とか說是とか云ふときは、他に何か指定するものなかるべからず大に迷を生ず

普賢菩薩勸發品――我於寶威德上王佛國遙聞此娑婆世界說法華經……共來聽受唯願世尊當爲說之云云

普賢の遠來卽ち法華經にあらずや、然るに普賢菩薩此娑婆世界に法華經を說くを聽くとある上は、普賢遠來の外に法華あると云はざる可らず、若し外に法華經ありとせば、勸發品は法華經以外と云ふの不思議なる結論を生ずべし如何

右の如き種類の文句は法華經のみても幾十ヶ所も可有之、他の經典に於ても殆んど此種の文章之れなきもの稀なり、此點に就ては大內博士(青巒居士)にも、其他某高僧にも御伺致し候得共、何分に了解し得べき尊答に接せず、何卒俗人たる吾人にも解し得べき樣御示し願上候、左の質問は特に法華經に關し、然かも法華經中の主要なる點に就ての疑問に可有之と存候

方便品――開示悟入の佛知見

此の佛知見とは如何なるもの乎、二乘作佛乎、佛壽無量乎、又化城諭乎、火宅諭乎、斯の如き一局部にあらずとせば法華經の全部乎、若し全部なりとせば前段の問の如き普賢の遠來も觀音の功德も皆佛知見の內なる乎、從地涌出寶塔出顯の如きは顯はれ來りたる事實ならずや、其事實も亦知見なりとは意味を爲さず、然らば經中孰れの部分をか指して佛知見なりとすべき處ある乎、若し指すべき處ありとせば單に佛知見としては了解し難し

右の如き理屈的の見地を以て經文を讀誦すべきものにあらざるべきも去りとて疑ありて決ぜざれば信を生じ難きが故、不顧失禮心に思付きたる期を失せず、御伺仕候段不惡御了承願上候先は草々拜具

鈴木充美

本多上人猊下

▲鈴木充美氏の質疑に答ふ

肅白過日は御尊翰に接し早速御答可申上の處、丁度第十五師團各隊講話の爲め、出張の際にて遷延相成奉鳴謝候、御試問の二箇條は左に略答仕り候、幸に御賢諒被下候はば幸甚に存し候、何れ拜眉の節可申上候敬具

本多日生

鈴木充美殿貴下

法華經の各處に此經とあるは、何れを指すものなりやとの御不審は往々他の人よりも聞く處に候、此は經要を指す場合と經の正宗を指す場合と、一四句偈を指す場合と經の全部を指す場合等の種々の不同有之候、第一經要を指す場合とは、神力品に(拙著法華經講義七ノ二〇一頁)一心受持讀誦解說書寫の場合に、同頁所引の正法華經には、欲了斯經要と有之、而して妙法華經は單に此經と書するも、同卷一九四頁に『以要言之如來一切所有之法如來一切自在神力如來一切秘要之藏如來一切甚深之事』と云ふこの以要の字に就て見れば、この四句の要法を指して此經と云ふは明かなり、天臺大師はこの文に依りて玄義十卷の五玄卽ち名躰宗用教を釋し、之を指して妙法華經となす、日蓮上人の題目を受持せしむるは卽ちこの『題總二一部一』の旨趣に由り、五玄具足の妙名卽法華經として之を弘めしなり、陀羅尼品の本文に『受二持法華名一者』とあるはこの意なり

第二經の正宗を指す場合とは、佛敎の經典は何れも序分正宗分流通分の三段に分かれ、而して此經と指す中心は正宗分なり、この正宗分は、迹門にては開三顯一の法門にして卽ち諸法實相の眞理なり、本門にては開迹顯本の法門にして卽ち本佛の顯本たる宗敎の本尊なり、此諸法實相と本佛顯本の二大敎義を指して法華經と云ふ、天台大師釋に曰く迹門正意レ在レ顯二實相一本門正意顯二壽長遠一と、章安大師曰く、文心莫レ過二迹本一と、之に由つて日蓮上人は方便品と壽量品とを讀誦せしめ餘品は枝葉なれば之に隨ふと說けり

第三經の一四句偈を指す場合とは、法師品に『受持讀誦解說書寫妙法華經乃至一偈於此經卷敬視如佛』とあり、又隨喜品に『聞二法華經一偈一隨喜功德』と說けり、この場合は經中の要文卽ち今此三界の文とか、如來秘密の文などを指すなり

第四經の全部を指す場合とは、陀羅尼品に『具足受持

供養經卷』とあり又他の多くの場合には『廣』くの字を用ゐ居れり、日蓮上人は全部よりは經要を指すの主義なれば、廣略要の中には要を取り、要中の要として唱題行を起せり、故に遺文に法華取要抄と題するあり、その中には『史陶林の請經の法には細科を略して元意を取り九包酒の相馬の法には玄賓を略して駿逸を取る日蓮も廣略を捨てゝ肝要を好む』と云へり、又他の遺文に不輕品の『單行二禮拜一』を釋して『非レ直二一經一』と云ひ、『專持二題目一不レ雜二餘文一』とも云へり

右の四種に就て、貴問の經文を見るに寶塔品の前文は經の正宗を指し、後の方は經の全部を指し、涌出品の廣說此經も同樣なり、次の說是は安樂行品を說き、他方の發誓に對して之を止め給ひし事を指す、勸發品の說法華經は此に至るまでの全部を指し、而して再演法華に於て、四法成就卽法華經の大要なるを敎へ給へり

大体斯かる主意にて御賢諒相成候事と信じ候

佛知見とは何れを云ふやとの御尋ねは、尤も大切の事に候、之に迹門の見解と本門の見解あり、天臺と日蓮との分かるる所以に候、迹門と天臺とに依れば、諸法實相卽ち一念三千の妙旨を照見する佛知見を吾人に具有せりと云ふにあり、本門と日蓮とに至りては、この實相の妙旨を尊重しつゝ、更に進んで佛陀の活動卽ち濟度の淨用と、衆生の向上卽ち佛性の顯動との二者が精神的に感孚する有樣を、宇宙の妙相として照知するを指す、而して今の用語に於て云はゞ、迹門は必然的の生佛の關係を見るも、精神的關係を明かにせず、無明緣起の三千を見るも法性緣起を知らず、又佛陀の人格的實在を明かにせず、故に日蓮上人立正觀抄に曰く『本地難思の境智の妙法は迹佛等の思慮に及ばず、何に況んや菩薩凡夫をや……止觀の二字を觀を佛知に名け、止を佛見に名くと釋すれども、迹門の佛知佛見にして妙覺極果の知見にはあらざる也』と又十法界抄に曰く『本無今有の失何ぞ免るゝを得んや、無始の本佛を知らざるが故に無始無終の義缺けて具足せず、又無始色身常住の義無し』と又立正觀抄に曰く『法華經の佛は壽命無量常住不滅の佛也、禪宗は滅度の佛と見るが故に外道の無の見也』と、之に因て諸法實相の上に本佛の人格實在を見、而して本有己來の大慈悲と衆生が感孚して無限向上を辿りつゝある有樣、即ち分別功德品に說ける『佛常に在まして四衆を救ひ玉ふ有樣を實相として見るが深信解の相なり』と說けるもの、卽ち本門の佛知見を洩せるなり、他は拜眉の日に讓る

斯くして本化の

教光無盡

▲本化記者團日蓮門下各雜誌社が聯合握手してより既に一年有半例月一回の講演會と法螺會の開催により數百年來墻壁を築いて居つたのも互に意志の疏通する所ありて水魚の思を爲し各自胸襟を披瀝して談じ語らう氣運になつた固より何等感情の相背くものなきは言ふまでもなく唯だ昔し理論日蓮教徒たる時代に於て經典釋書の說明方式から相離れ散視するやうになつたのであるが時代の推移と共に何つまでも傳習的思想に支配せられて居るべき筈でない各自の所屬教團は分れて居るが主義發揚の爲めには協力一致の歩調を取るのは佛子として當然の態度である吾等提携以來未だ具体的に大事業を畫策したるものとてはないが近き將來に於て一歩宛實際問題に着手するであらう吾等は徒らに聲を大にして空騒きを好まざるもの刻々に統一の氣運をつくりて道の爲に努めんとするものである

新年の初會は一月の三十日相開いて配抔の間に時事を語り傳道の方法を論じ氣焰はいつもの如く高く殊に本年は布教の鹽田主幹と天晴地明の記者も加はつたので中々に賑かであつた二月は十一日に統一閣を會場として記者團主催の下に各雜誌社の記者が廣長舌を振つた何れも一騎當千の戰士なれば卓驤風發の熱火を飛ばして聽衆の心の眠りを醒ますものがあつた終つて晩餐會を開き日宗教育機關の統一問題やら大正博覺會に於ける信徒宿泊上の問題など議題として互に意見を交はしさらに相會して協議することになつて別れた

▲小西俊平君の得度式　帝國大學文科生小西俊平君は幼少時代より内に燃ゆるが如き信仰を包み外に日蓮主義の實行に勵み本佛の愛子として努力の生活を送り來りしが法緣こゝに熟して佛弟子となり日蓮主義の宣傳の戰士たる光榮を擔ふに至れり君は牛込區原町久成寺住職田井日晃師を發心の師と仰ぎ一月二十日午前十時久成寺本堂に於て得度の式典を擧げたり先是本多大僧正は俗名俊平を改めて妙道と

名けたりしが色讀法華の日蓮主義者の法名たるを覺ゆ同日は本多大僧正は授戒師として野口笹川今成井村山根三上木村山名熊井高木安藤富田師は證明師たり別席には親族及久成寺愈代人參列し森嚴なる法筵を設けて大本尊の知見を仰ぎ左の儀式を行ふ

(1)三寶禮(2)受持(3)勸請(4)方便品讀誦(5)出家の辭(6)發願文(7)說示(8)剃度(9)傳衣(10)紀名授戒(11)自我偈及訓讀(12)題目(燒香)(13)受持(14)三歸退座の順序にて式典を終る

發願文

謹而奉勸請本門壽量の本尊知見照覽の御前に於て不省妙道謹而發願文一篇を奉る夫れ大勇猛世尊並日蓮大聖人は慧の燈明也我等が爲に能く忍び難きを忍び給ふ我今沙門に入るは誠に之に感激するが爲也誠に世尊は大恩在ます能く希有の事を以て我等を憐愍教化利益し給ふ無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん我等將に身を終る迄慈父世尊の爲に供給し走使し微力なりと雖畢生の力を致し至心至誠大法の宣傳顯揚に從事し奉り以て四恩に奉答せん願はくは哀愍敎護あらせ給へ

大正三年一月二十日　田井日晃徒弟　妙道謹上

同日木挽會員代表として市村英治氏の祝辭及岡山日蓮鑽仰會より祝電ありき式後別席にて披露の宴を張り實兄小西左平氏の參列者に對する謝辭久成寺愈代人の得度式によりて訓化されたる所感を述べ實兄小西辯護士の現代の風潮と宗教の權威に就て其所見を發表し本多大僧正の訓話ありて後妙道師は今後道のために努力すべきを誓ひ互に其將來の目覺しき活動を熱望し自重を促がして散會したり因みに小西氏の得度式を祝して

▲末濁る流れに君は黑染の袖に蓮のこゝろつゝみて　日宗

▲經讀鳥や如說修行の聲高し　日莊

●緊急廣告●

▲法華經は天地法界の秘藏思想統一の最高指針である、吾人の思想界に最高の指針がなければ向上發展することが出來ない、法華經は健全なる文明を產み出すべき大なる力である、人を人らしくする教である、此の法華經に現はれたる思想に靈化するを得ば眞實に文明人たる資格を得る、文明人たらんとするもの亦現に文明人を以て誇るものは必ず本經を拜讀せなければいかぬ、さうして法華經的思想の生活を送ることを努むることが自己の向上を致す所以である

縮刷 妙法蓮經 並 開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金四錢
第貳種 布裝天金 正價金壹拾五錢 郵稅金六錢

第三種賣切れたり

▲一家の重寶として法華經を備へることを勸むる

▲本經は價が安くて携帶に便利であるし亦體裁も至つて宜い、御覽になれば成程と思はるゝ

▲送金は『振替口座東京一二一九番』へ御拂込になれば安全で手數が懸らない

發行所 東京淺草北清島町十四番地 統一團

活動史

東京

我徒が大正二年に於ける活動は未だ天下を風靡するに至らずと雖講演に文書に畢生の力を盡して當千の戰士が活躍する處何等かの反響があつたことであらうこの思想上の運動は短かき期間に於て功を奏するものでない唯だ倦まずして自己の天分に努むることこそ大事である

一月十六日統一閣に於て勞働者の爲に慰安會を開いた何がさて數入りの日なれば清新なる娛樂によりて半日を面白く送らんとするもの陸續詰めかけ來り午後一時半には千二百餘名の來會者があつた本多大僧正は慰安講話の爲に壇上に現はれ人は忠實に働くと共に思想の修養に努め神佛に敬仰を捧ぐべきものであると敎へ柳家小三治の滑稽なる落語二席ありて聽衆を笑はし少年の勇壯なる劍舞は人の意氣を鼓舞し東家樂松の安政年間の劍客の浪花節あり終りに當時關東節の先驅者たる東家小樂遊の浪花節ありて聽衆を泣かしむるものがあつた閉會後二階にて甘酒の饗應あり一同悅びに充ちて歸途に就いたのは午後五時であつた

▲一月二十五日日曜講演京藤師の日蓮主義信仰の意識を說き笹川日堂師は時代の要求と日蓮主義の關係に就て懇切なる說明を試め野口日主師は十界互具の自我と云へる內容を論じて吾人の努力を促がし多大の印象を與へたり

▲一月八日小石川原町本念寺大道會は笹川師の熱心なる講說によりて信仰を與へたりと云ふ

▲一月十日淺草新谷町慶印寺の知見會は山根日東笹川日堂師の講話あり餘興福引などありて盛會の由

▲下谷谷中本授寺にては關田笹川師の懇篤なる法說ありしと云ふ

▲一月十五日淺草吉野町常福寺の例會には三上師の信仰利益の實例談ありて純信を喚起したりと云ふ

▲同廿五日淺草圓常寺親善會は鈴木山根師の講演ありたり

▲一月七日午後六時淺草永住町妙經寺思恩敎林初會を開く海野氏開會の辭を述べ淺尾氏の所感演說あり野口日主師は信心は福を得又安心立命の法なりと說き餘興には少年劍舞浪花節福引景品などありて盛會なりしと云ふ

▲府下品川方面は妙國寺本光寺妙蓮寺にて講演又は少年會の催しあり其運動振り中々盛んにして法益多大なりしとぞ

▲二月一日統一閣に講演關田養叔師の精神生活上の意義より信仰の本義に及び詳細に論述し本多大僧正は倫理思想の根底は神佛敬仰の觀念あるべき所以を明かにし淺薄なる倫理觀念に痛棒を加へたり

▲一月二十日牛込久成寺に講演を開き熊井師の前講に次て大多大僧正の信仰功德の法話ありたりと

▲一月二十五日午後一時日本橋人形町相互倶樂部に於て小林大僧正

三周年追悼講演會を開く正午鈴木師導師の下に山名井村關田熊井木村高木三上師及學會員一同賓前に法味を捧げ山口鏡太郎氏花は根にかへるの意義を說き增田松治氏は佛敎徒の使命を語り吉田珍雄氏は感恩道德の要義に就て所見を述べ小島傳平氏は回向の形式と心意に關して信仰の內容を說き神谷師の主師親の德を具へる佛陀を紹介し山名日宗師は國家の興廢は風敎の隆替に存し風敎の統一權は日蓮主義に存する理義を明かにし貳百五拾餘名の參聽者に無限の感動を與へたりと云ふ

京都 一月の一日二日三日は妙滿寺に於て午前三時より國禱會を修し正法興隆天長地久を祈る十日夜成就院に護正會を開き川崎師開目抄を續講し終つて一同新年宴會を開く十一日午後同院に婦人會を開き川崎師松野殿御書の一節を講す十三日午前桃中軒雲右工門妙滿寺に參詣し亡妻本正院の追弔法會を修し四月本山講堂に日蓮聖人傳を語るべく約す同日午後國光婦人會初會を催し野老師の說敎あり終つて福引の餘興を催し盛大なりき十六日午後法光院に妙光婦人會を催し江見師は日蓮主義の輪廓を平易に說き金光師は信德破定業と題して信仰の効果を語る十七日午後一時より川東本正寺に婦人會を開き江見師は信仰の要素を擧げて大正婦人の自覺を敎へ金光師は日蓮主義より見たる女性に就て聖語を引用して懇說し終つて福引の餘興を催す十九日午後京都天晴會の例會を丸太町樹三枝に開く講師として文學士小林一郎氏日蓮主義と藝術家と題し藝術と宗敎の關係を語り特に光悅光琳の事蹟を詳說して二時間に亘る終つて昨年度の會計報告幹事の改撰を行ひ酒田惠綱中村寬澄川崎英照天野治兵衛西村喜一郎西村千吉大八木德三郎氏當選す夫れより宴會を開き橫堀工學博士の感想談田邊獅子吼の龍ノ口の薩摩琵琶ありて盛大なる催なりき廿日午後正行院に婦人會を興し其初會を催す江見乾丈師開會の辭を述べ野老師は源淸ければ流長しと題し什師及先帝の御歌を引ひて懇說一時間に亘る吉川秋山氏等尤も盡力せり廿六日午後一時より櫻島罹災橫死者の追弔法要を修し終つて野老師は天災に就ての說敎を爲せり其夜西洞院蛸藥師木田氏邸に修養會を開く川崎師は修養論を詳說して現代人の欠陷を指摘す會するもの三十余人多大の感動を與ふ廿七日夜京都鐘紡會社南寄宿舍に於て百余人の男工手發起し修養を開く川崎師快擧を奮つて人生々活上に於ける修養の必要を說く一同非常の感にうたれ自今每月同師を聘して開催すと丹一日午後七時妙滿寺廣間に於て客廳發會を擧げし帝國大學三高同志社醫專法政大學等の學生三十余名より成る京都學生日蓮研究會第二回の例會を開き野老師病の故を以て川崎師代つて自今法華經講義續講を爲すべしと以て如何に京都敎界が新しき方面に活動しつゝあるか

を知る

舞鶴 同地の有志相會して信行會を組織し信仰上の談話を交換して各自の精神を訓練して居らるるが其會員相互は自治自制の心縣を以て修養に努めて居る同會の桑村儀三郎氏は專らこの主義鼓吹のために盡力せられつゝありと云ふ

木崎 大乘寺木村師は立正講を設け每月十三日公開法話を爲し漸次熱心なる信徒の增加を見る

大阪 一月廿三日午後五時北區堂島中一丁目たじ寅樓に於て天晴會新年初會を開く幹事池田爲三郎氏は昨年中の會務を報告し役員改撰は座長指名の委員に托し幹事五名は池田爲三郎岡島伊八梶木日種八代祐太郎山岡順太郎の五氏重任となり評議員には細字榮野口友七吉田善之助郡山庄兵衛中平淸次郎五氏と確定し引續き藤澤先生の講演約一時間に涉りて趣味無量更に會員各自の感想談を終りて晩餐會を開き各自歡を盡して散會したるは午後十一時なりき

▲一月十二日生玉前町堂閣寺に於て講演會を開く鷲田顯正師は「迷信の排斥」能仁一十師は「人生觀の徹底的意味」高木治地師は「善惡の標準」に就て語られたり因みに來聽者には抽籤を以て法華經一部を每會進呈の事

▲顯本婦人會は堂閣寺に於て廿二日午後二時より開催能仁一十川崎英照師の講話ありたり

▲蓮成寺に於て廿三日午後七時日蓮主義講演會開催鷲田師は佛陀の三德能仁一十師は現代青年の師表梶木布敎師の懇篤なる講演あり中々盛會なりき

▲堺櫛屋町妙滿寺に於て一月廿日午後七時より開催能仁一十師の自治の力及び川崎英照師の法華大意に就て講演ありたりと云ふ

廣島 一月八日新川塩町本照寺に天晴會新年初會を開き會員各自の所感講演によりて信仰の力を養ひ尙次會よりは大橋桃井島田師が法華經講義を爲すことに決し各身讀主義のために盡力すべきを誓ひ前途を祝して散會したりと云ふ

九州 九州に於ける敎會は昨今活氣を添え中にも久留米本泰寺の德敎正信會は猛烈なる運動を試みて地方人心を風靡して居る一月十日午後七時同會を開く商業學生新開淸八氏の日蓮主義の信念及第十八師團高山經理部長の不平失望と日蓮に就て所感を述べ中原通隱師は日蓮上人の人格を紹介し濁濁せる人心に無限の淸水を與へたりと云ふ

富山 魚津天晴會は一月二十五日東小路長敎寺に開いた本行氏開會を宣し上野秀雄氏は大正の年代に大活躍を試むべきを論じ土田龍寬氏は日蓮主義によりて現代を覺醒すべしと說き寺尾興三郎氏は非國家主義の思想を排斥して上人の忠誠を說き中村寬澄氏は時代思想に適合する宗敎は日蓮主義なりと結論し人心に微妙の訓化を與へたりと云ふ

統一評論

統一主義——大獅子吼

◉自治權擁護軍の陣容を論ず……社論

伏魔殿日宗大學解剖

▼生活難上より四萬の醫師を論ず……田代博士

◉自治權問題發生後の大島知事に對す……高鍋日統

▼統一評論社辻說法の大教訓……小笠原子爵

▼本佛に功德化されたる妙法を論ず……田邊貞頭

▼七里濱の仙境雨乞の靈場を紹介す……一記者

◉自覺せる國民……大隈伯爵

▼東京郊外の仙境洗足の池に遊ぶ……一記者

▼不賛成ながら得要領の岩下淸周……高鍋日統

▼英雄の遺業「淸正公の治水事蹟」……金崎惠厚

◉對外政策及び政爭を論ず……小寺代議士

▼買被らをたる犬養の正體を論ず……黑須代護士

▼本化各敎の合同と不二山を論ず……柿花啓正

◉主義殉死の士主義に蘇生せしめよ……社論

發賣元　東京丸の内有樂町一ノ三（電話本局四九七三）統一社

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕各宗の佛具一切陳列仕置候

正價附
三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價略目錄を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢附送付被下候はゞ迅速呈仕候。此の目錄を御覽あれば。寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも坐ながら買物安價にてきき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

小包條例附（郵券四錢）

●佛具●佛具金物一切●過去帳の類●大鉢若經●一切蒔繪●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●宇鐘●木魚●拂子●自錄●杏●珠數●大傘●扇子●印●雪洞●鐘●金襴●水引●打敷●和幡●唐帳●人天蓋●柴燈類●燈明皿●木像●厨子●木魚●經机●數珠●經卷●袋●鉢●意匠●白鉢●水差●一寶藏寶●並に手綸●副●匙●箸●板●經物●寒●高盃●裝●裝文庫●獻茶器●獻菓子●香具類●正價附にして御買物坐ながら自由自在

◉佛具卸部　京都市三條通小橋西入　本錄　三法堂藤田總次
振替貯金口座東京一二一九番
特電話二千七百八拾三番　大阪一四二五九

◉小賣部　同市三條通大橋西入　三法堂佛具陳列場

大僧正本多日生師編

橘香集

本書は法華經の要文と日蓮上人の遺文中より警句敎訓を抄錄したるものにして內容に於て發心敎相佛陀人身法界本尊行法得益警策の諸篇に分類して研究引文を要する場合は尤も至便にして日蓮主義鑽仰者の供ふべき珍書也

革製皮金文字入美本金六拾錢
上製賣切れたり
並製金拾錢
郵稅金貳錢

毎月一回十五日發行、一部金六錢　郵稅五厘　一ケ年金七拾八錢　代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ此場合ニハ誌料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正三年二月十五日印刷發行

發行人　井村日成　編輯人　山根日東　印刷人　鈴木日崇

發行所　統一團　東京市淺草區北淸島町十四番地

（第二百二十八號）
明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
大正三年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

◀緊急廣告▶

▲混亂せる現代思想に最高指針を與ふるものは法華經也
▲法華經は健全なる第三文明を產み出すべき大なる力也
▲文明人は最高の思想に接觸するを要す。吾人は文明人にして法華經は最高の思想也。然らは則ち文明人たる吾人は本書を讀まざる可らず

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師著

法華經講義

特價金三圓
郵稅十六錢

▲文明人の誇りは財にあらず金にあらず。洗練せる思想と高潔なる人格を具ふるに在り。須らく第一の重寶として本書を備へよ
▲本書の再版將に賣切れんとす。此機を逸して千歲悔ゆる勿れ

發行所　東京淺草北清島町（振替東京一二一九）　統一團

大正三年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百二十九號

統一

大哉日蓮主義　大僧正　本多日生

教育と宗教　法學博士　山田三良

開結二經の研究（三）　井村日咸

日蓮主義と名士　記者

爾の精神に靈火を點ぜよ　三上義徹

▲スエズより通信
▲北海道巡教
▲各地教報